高齢化社会における余暇関連施設の開発に関する基礎的研究

立命館大学理工学部　正　員　春名　攻
立命館大学大学院　学生員　○大島　良彦

1．はじめに

わが国の高齢者の余暇活動は、欧米諸国と比較すると活動範囲が狭く、消極的な傾向が伺える。このことは、日本の高齢化が急速に進んだためであり、日本人の民族性からくる価値観の問題も含めて、社会システムの変化が高齢化の進行に追いついていない影響であるとも考えられる。人生80年時代を迎えた現在においては、かなりの速度で高齢化が進んでいるが、健康、社会保障をはじめ、雇用、文化、町づくり、生きがい対策など社会の仕組みや人々の意識には人生50年時代の影響が色濃く残っている。人々は、明るい老後のイメージを抱いている一方で、健康・経済面・生きがい等についての不安など、将来の暮しに多くの不安を抱いている。そのため、明るく活力ある長寿社会を実現するにはためには、このような様々な問題を克服し、人生80年時代にふさわしい新しい社会システムづくりを推進していく必要がある。

今後は、家族をはじめ地域のあらゆる協力体制と、公的施策により、高齢者が真の安らぎと生きがいに満ちた生活ができる地域社会の現実を図らなければならない。そのため高齢化社会における諸問題をとらえるにあたって、社会的な環境整備をすることが非常に大切であると考えた。このような背景から、高齢者を中心とした人々の欲求を満たす社会システムの整備は急務の課題である。

2．活力ある長寿社会の整備構想の背景

（1）長寿社会の現状

a）関心の高い健康づくり

健康であることは、豊かで活力に満ちた生活を安心して送るための最も大切な要件の１つである。このような健康に対する不安に対処するためには、要介護老人のための施設の充実や、介護マンパワーの確保、民間保険の充実などはもちろんであるが、なによりもまず自らが寝たきりなどにならないように、若い頃から健康を維持し、それを支援していく未然防止型の対応が重要である。

b）生きがい形成の重要性

長寿社会の形成に伴い、第２の人生の充実が重要な課題になってきている。高齢者にとって第２の人生を積極的に「生きがい」を持って過ごし、それを通じて自分と社会の関わりを深めていくことは、高齢期において豊かな生活を送る上からも、また、高齢者自身の健康維持・増進の上からも、きわめて重要な意義を持つものと考えられる。

c）高齢者の社会的役割の重要性

経済的、時間的な負担が現役勤労世代に集中すると、勤労者にとっては勤労意欲の低下を引き起こし、社会活力の減退をもたらすと共に、現役勤労世代が男女とも勤労生活に追われ、家族や地域社会を維持していく機能が大幅に低下することも考えられる。このような中、よりよい社会を築いていく上で、高齢者の長年培った技能・技術や知識を、生産・家庭・地域活動などの様々な場面で社会に還元していくことは有用なことである。加えて、このような活動を通して高齢者の存在意義の社会参加、さらには、経済的な余裕の形成等々が促進されると考えられる。このような観点からの高齢化と高齢者の社会的役割を描いて図１にした。

（2）活力ある長寿社会の形成

人口高齢化の進行は、健康で自由時間を豊富に持ち経済的にも恵まれた高齢者の増加をもたらすようになった結果として、このような高齢者が社会の構成員のかなりの部分を占めるようになるものと考えられる。今後の長寿社会では、高齢者層を、地域社会や経済社会を支える新たなマンパワーとして捉え、

Mamoru HARUNA, Yoshihiko OHSHIMA

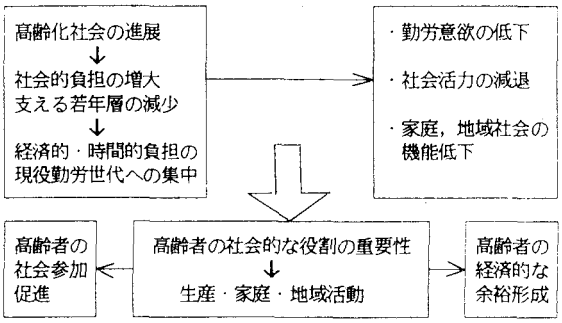

図１　高齢化と高齢者の社会的役割

社会の活性化につなげるように活用していく発想が必要不可欠であると考えた。ここで、このような高齢者像の変化を図２に示した。

（３）２１世紀での時代の流れ

ａ）価値観・ライフスタイルの変化

高齢化率がピークに達すると予測される2025年頃の高齢者は、戦後生まれの世代が中心であることも今後の長寿社会を考える上で見逃せないことである。このことは、高齢者の仕事も、従来のなだらかな引退生活とは異なり、リタイア後の生活ひいては地域社会へ適応した生活姿勢という点からみて、高齢者の活動は、生きがい形成の関係を考えた仕組みづくりの必要性を増大させると考えられる。また、高齢者の新たな社会的役割が重要となると同時に、若年層ができるだけ早い時期から地域社会との接点を持ち、若年期から継続した活動や若年層が地域社会の高齢者を始めとする他の層の人々と交流する場の形成も必要になってくると考える。このような価値観・ライフスタイルの変化の捉え方を図３に示した。

ｂ）物の充足から精神的ゆとりの追求への変化

所得水準の向上や自由時間の増大などを背景に、人々の生活意識も多様化し、生活の力点は食・住か

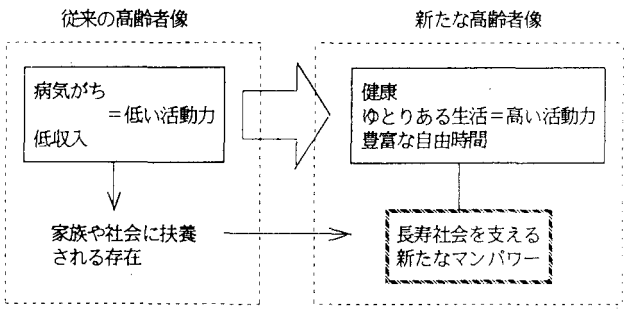

図２・高齢者像の変化

・ライフスタイルの多様化	様々な活動の需要増大
・志向の高度化	活動内容の高度化・多様化
・核家族化	高齢者の新たな社会的役割
・サラリーマンの増加	若年期からの継続性
・個人主義化	世代間の交流の重要性

図３　価値観ライフスタイルの変化

らレジャー・余暇などの精神的なゆとりの重視へと移り、同時に量から質へというようにニーズも変化しつつある。

ｃ）クオリティーオブライフの追求

今後の社会においては、①人々の生活の中にゆとりや潤いを求めるニーズ、②保養やスポーツを通じて健康な社会生活を維持すること、③人々が地域社会との接点を持つこと、④生涯を通して学習を続けることのできること、等々が社会的ニーズとなってこよう。また、これらは次のような整備と結びつけられよう。すなわち、

①人々の生きがい創造に貢献すること、人間的成長の志向に応えられる場の整備

②うるおいのある人生を追求すること、人々の高度化する志向に応えられる健康づくりの場、ゆとりある余暇生活を追求する場の質的整備

③自己実現の機会提供に貢献すること、創造的活動の場とその支援システムの整備

④生涯学習の機会提供に貢献すること、学習活動の場とその支援システムの整備

以上のことを行うことにより、「より人間らしい生活の質」を提供していくことが可能な活動拠点の整備が重要である。

これらのことを踏まえ、活力ある長寿社会の整備構想の背景を取りまとめて図４に示した。

３．高齢者のためのリゾート・レクリエーション施設把握のための分析に関する考察

以上のような事前の概念的な考察を踏まえて本研究の実証的な検討を進めたが、以下においてその概要を取りまとめて示すこととする。

本研究においては、新たな第２の人生ともいえる老後の期間を生きがいを持って、健康に過ごせるような社会基盤の整備が必要であ

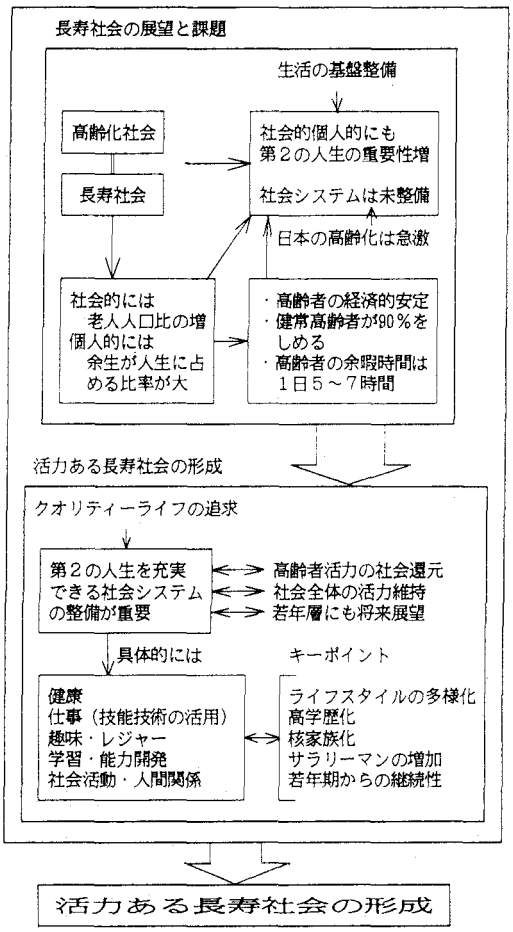

図４　長寿社会整備構想の背景

ると考えた。そのためには、余暇活動におけるレクリエーション施設整備に対する高齢者のニーズを十分把握していくことが、高齢化社会での施設整備計画策定において必要かつ重要な前提条件であると考えた。そして高齢者の生活活動の場として、比較的手軽に趣味・娯楽や学習活動を行え、さらに心身のリフレッシュが行える快適な余暇空間の創造が、高齢化社会に対応したリゾート・レクリエーション施設の整備計画における重要な意義であり、重要な役割であると考えた。そこで、他の年齢層と比較して、高齢者の方の余暇活動に対する意識を把握するために、調査項目の分析を行った。

（１）アンケート調査項目

人々の余暇時間におけるレクリエーション行動に影響を及ぼす調査項目として、個人の属性、学習機会の満足度、余暇意識、今後の学習希望、グループ活動の実態、などを把握していくこととした。さらに今後の高齢者の方の余暇関連施設の利用形態を、他の年齢層と比較して把握していくこととした。また、アイテム間の構造仮説のフローとして図５に、アンケート調査項目として表１に示すこととする。

（２）アンケート実施結果

アンケート調査としては、対象者を京都府に在住の17歳以上の男女に限定し、マーケティングリサーチ的手法を参考として調査を行った。

（３）アンケートの一次分析結果

ａ）余暇関連施設の必要度

今後、学習や文化、スポーツなど活動をより一層進めていくために利用したい施設としては、「生涯学習センターなどの総合学習施設」が40.3％、「運動広場、体育館などの体育、スポーツ施設」が38.0％、「公園、緑地、キャンプ場などの野外施設」が35.7％、「文化会館などの文化施設」が29.0％という割合になっている。以下、「図書館などの学習施設」が21.4％、「美術館、博物館などの施設」が18.9％、「福祉会館などの福祉施設」が16.6％、「公民館、集会所などの施設」が15.2％となっている。

60歳以上の高齢者で上位４位の施設をみてみると、「公民館、集会所などの施設」、「生涯学習センタ

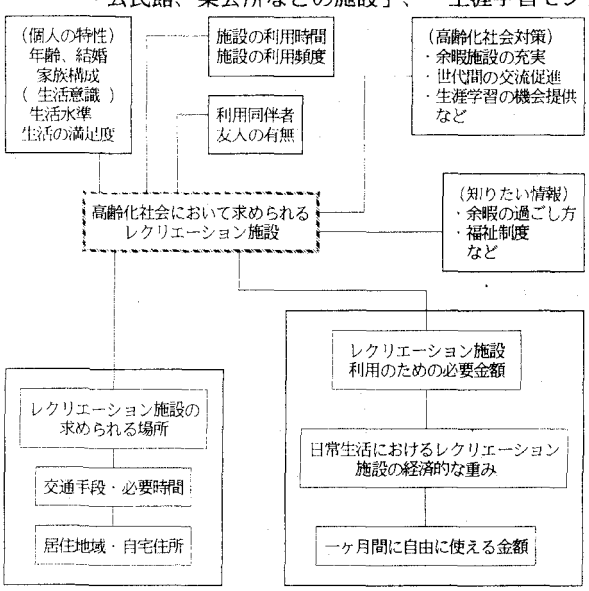

図５　アイテム間の構造仮説のフロー

表1　アンケート調査項目

<生涯学習についての意識> Q1　生涯学習という言葉	<余暇意識> Q11　平日の平均自由時間 Q12　休日の平均自由時間
<生涯学習の必要性> Q2　必要かどうか 付問　理由	<京都府の特色ある生涯学習> Q13　学習活動の事業の展開方法 （1）歴史的な遺産を生かした学習 （2）京都の資源を生かした学習 （3）年中行事を活かした学習 （4）新しい京都らしさが出る学習 （5）大学や高校などの開放 （6）京都のアカデミズムを活かしたもの （7）不眠がなじみやすい事業展開 （8）地域性に応じた事業展開 （9）地域ごとの交流ができるような展開
<学習活動の現状> Q3　自分での学習、習い事の有無 付1　内容（9項目） 付2　目的（8項目） 付3　学習方法（10項目） 付4　場所（6項目） 付5　施設までの所要時間 付6　費用一年間分（9項目）	
<グループ、学習活動の実態> Q4　グループ、団体活動の参加の有無 付1　どのようなものか 付2　今後の参加の希望 付3　どのようなものか 付4　参加したくない理由	<学校解放> Q14　開放講義を知っているか 付1　増やしたほうがよいか 付2　どのような開放講義
<学生や就業者の関心> Q5　（学生の方のみ） 専門学校、カルチャーセンターへの参加 Q6　（就業者の方） 自分の仕事の時代の影響を受けているか	<今後の学習希望> Q15　学習したいと思うことがあるか 付1　どのような内容の学習 付2　どのような方法か 付3　どのくらいの支出 Q16　大学や短大の社会人入学 Q17　現在の生活
<学習に対する満足度> Q7　学習したいことで実現しなかったこと 付1　内容 付2　理由	<基本的属性> Q18　性別 Q19　年齢 Q20　未既婚 付問　共働きか Q21　同居家族 Q22　1番下のお子さんの成長段階 Q23　職業
<学習機会への満足度> Q8　学習活動の情報 付1　情報を得るところ 付2　情報を得る方法 Q9　居住地域の施設の充実度 Q10　今後必要な施設	<その他> Q24　京都らしさとはどのようなことか Q25　京都府の学習活動に関する要望

ーなどの総合学習施設」、「文化会館などの文化施設」、「運動広場、体育館などの体育、スポーツ施設」となっている。

地域別でみてみると、それぞれの地域で「生涯学習センターなどの総合学習施設」が最も高く、次いで、「運動広場、体育館などの体育、スポーツ施設」、「公園、緑地、キャンプ場などのレクリエーション施設」となっている。中部では、「文化会館などの文化施設」が高い。

b）生涯学習の必要性

生涯学習の必要性についての質問に対しては、約90％が「必要だと思う」と回答しており、「必要だと思わない」という回答はわずか5.4％である。

60歳以上の高齢者でみてみると、「必要だと思わない」が約15％であるのに対し、他の年代は約3％であった。

地域別でみてみると、「必要だと思う」がそれぞれの地域で約90％であり、地域別の違いはあまりみられなかった。

（4）アンケートの高次分析

（a）高齢者の余暇意識に関する分析

他の年齢層と比較して、高齢者の方の意識を明確にするため、数量化2類を用いて分析をおこなった。

高齢者層の特徴としては、一般に余暇行動の最も重要な影響要因として考えられている時間的条件と経済的条件について、比較的満たされた層であった。しかし、「活動の情報」では情報を得ている、「文化・スポーツ施設の充実度」では、充実しているとしながらも、「団体活動への参加」、「学習や習い事」にはあまり参加したことがない。このようなことから現状維持派であり、特に新しいことはしたくないという比較的消極的な意識であった。

4．おわりに

本研究においては、高齢化社会となる今後のわが国において、高齢者を含めた社会の構成員全ての人が、健全に安心して生活を楽しんでいただけるようなリゾート・レクリエーション施設の整備に関するニーズを把握するために、前述のようなアンケート調査を行った。ここでは、余暇活動のための施設整備に関する人々の意識や要望をおおまかに捉えた上で、特に高齢者の方の施設整備に対する要望も捉えることができた。

今後は、このアンケート調査結果をさらに詳しく分析、検討していく予定である。さらに、性別、年齢を越えた共通のニーズの違いについても明かにし、今後の高齢化社会において求められている都市づくりや、リゾート・レクリエーション施設に対するニーズを明らかにしていく必要がある。